An Ideal Husband における揺らぐステレオタイプ

北　田　沙　織

はじめに

Oscar Wilde が戯曲 *An Ideal Husband*（1895）を発表した当時のイギリスでは、教育法の改正や選挙権運動の高まりに伴い、女性の社会的地位や権利の向上が叫ばれていた。こうした大きな転換期を迎えようとしていた19世紀末という時代において、因襲的なジェンダー・ロール、「家庭の天使」像からの脱却を求める女性たちに応えるように、「理想の妻」ならぬ「理想の夫」をテーマにした劇が流行した。ワイルドの作品は公演当初、イギリス中で結婚のあり方や「理想の夫／妻」を巡る議論に火を点けた。また、彼の妻である Constance Wilde は、Georgina Mount Temple という人物に宛てた手紙の中で、『理想の夫』は彼のこれまでの作品の中で最も美しいと述べ絶賛している（モイル16）。

ところが、現代では彼の四つの喜劇作品の中で、本作品は他の三作に比して低く評価されることが多く、顕著な女性差別が見られると批判を受ける傾向にある。例えば Kerry Powell は、著書 *Oscar Wilde and the Theatre of the 1890s*（1990）の中で、この作品には、時代を逆行するかの如く、薄れつつあったジェンダーのステレオタイプを復活させるというワイルドの意図が込められているのだとの見解を示している。[1]

> To defend his politician［Sir Robert Chiltern］against radical demands for male purity, Wilde recultivated an eroding sexual stereotype of the Victorian era—that women are intellectually the inferiors of men, unequipped for ambition and action, but well-suited for the homelike virtues of mercy and

love.（Powell 101）

本作品は、当時のイギリスを支配していた、男性によるステレオタイプ的な女性観を打破する作品であるように思われるが、パウエルの指摘に従えば、ワイルドがむしろそれとは正反対の主張をしていたということになる。しかしながら、一見誰もが「理想の夫婦」と羨む、将来有望の有能な若手外務次官 Sir Robert Chiltern とその妻 Lady Gertrude Chiltern、親友の Lord Arthur Goring、そして彼らの宿敵 Mrs Laura Cheveley という中心人物たちからは揺らぎを見せる関係性が示されている。こうしたことから、本戯曲が性的ステレオタイプへの回帰を目指したものというよりも、ステレオタイプ的な関係が組み換えられる可能性を示した作品であることを検証したい。関係が組み換えられる可能性とはどういうことか。それはすなわち、この４人によって繰り広げられるこの奔走劇において、一見するとイメージが固定しているように思われるそれぞれの登場人物の二項対立的な関係性が崩されていくということではないだろうか。以下では、登場人物ごとに考察を試みる。

１．Gertrude と Mrs Cheveley について―貞節と不貞の境界―

ガートルードは貞節な女性の象徴、ミセス・チーヴリーは悪女の象徴として扱われ、相対立するこの二者が交わることは決してないように思われる。しかし、本章では彼女たちの二面性を分析することで、二人の間に存在していた差異は崩れる可能性を孕んだものであることを検証したい。ガートルードは学生時代から操行優良であり、常に社会規範に則った生き方をしてきた。その一方で、ミセス・チーヴリーは、道徳に従うことを嫌い、学生時代から盗みを働き退学処分を受けた経歴を持ち、その盗癖が祟ったのか、ロバート脅迫の駆け引きの中で、過去にダイヤモンドのブローチを盗んだことが発覚し、自らの立場を危険に晒すことになってしまう。さらに、かつてはミセス・チーヴリーと婚約を交わした仲であった夫の友人、アーサーが、彼女を “a genius in the daytime and a beauty at night”（173; act １）と表現している。

これが意味するのは、ヨーロッパ各国に対し大きな影響力を持つ彼女が、昼間は政治に関与し、男性社会の中で男性と対等に渡り合い、そして、注目したい点が、夜は人の好奇心を突き動かしてしまう（[*she*] *makes great demands on one's curiosity*）」（167; act 1）ような妖艶な魅力で男性の心を捉えるということである。実際、ミセス・チーヴリーは、その魅力でアーンハイム卿の愛人に登り詰め地位を獲得したのである。

このように、一見全く正反対の性質を持つガートルードとミセス・チーヴリーだが、二人にはある種の類似性があるように思われる。ガートルードにも、ミセス・チーヴリー同様、社会規範に背かなければならない場面があるのだ。ロバートとの夫婦関係に悩んだ彼女は、アーサーに助言を求めるため、夜更け頃に一通の手紙を書き送るが、その内容は次の通りである：“I want you. I trust you. I am coming to you. Gertrude.”（213; act 3）。アーサーもこの手紙を受け取った際、すぐには彼女の意図が理解できなかったように、この文面から助けを乞う主旨を読み取ることはできない。さらに、理由の如何にかかわらず、夜分遅くに既婚者である彼女が一人で男性の許を尋ねようとしたことは、社会通念上貞操を破る行為だと認識されてしまう可能性があるのだ。そして、ロバートとガートルードの夫婦関係を崩壊させようと企んだミセス・チーヴリーによって、この手紙が、ガートルードからアーサーに宛てられたラブレターとして、夫ロバートに送りつけられることになる。このとき、ガートルードは彼に事の経緯（いきさつ）を説明すれば、手紙が彼の手に渡ったとしても何ら問題はないとアーサーから説得を受けるが、耳を貸すことなくその提案を拒む。

> LORD GORING. I think it is better that he [Robert] should know the exact truth.
> LADY CHILTERN (rising). Oh, I couldn't, I couldn't!
> LORD GORING. May I do it?
> LADY CHILTERN. No.
> LORD GORING (gravely). You are wrong, Lady Chiltern.

> LADY CHILTERN. No. The letter must be intercepted. That is all. But how can I do it? . . . why don't you tell me what to do?（237; act 4）

このような反応から、夫に「純粋さ、高潔さ、誠実さ（a thing pure, noble, honest)」(210; act 2）を一方的に要求し、彼の道徳的純潔さ（moral purity）（Dellamora 126）に捉われていた彼女が、かつて秘書官時代に政治的不正に関与し、それを脅しの材料に、ミセス・チーヴリーから不正疑惑のあるアルゼンチン運河構想計画を議会で支持するよう脅迫を受けているロバートと同様に、手紙を軸に脅迫の舞台に上げられ、社会規範から外れた行動を取ったものと見なされてしまうことに気付かされたと言えるだろう。ガートルードの中では、貞節と不貞の区別はついているつもりであり、こうした問題に対し、彼女自身、無関係で安全な立場にあると信じて疑わなかった。しかし、客観的に見れば、その区別はつかず、その境界は崩され、結果として、彼女は不貞という範疇に置かれてしまいかねない状況を突き付けられる。そしてさらに、意識的に真実を隠すことが、ロバートと同じく罪の上塗りをすることになるという事実に直面し、愕然とする体験をすることになるのだ。

ガートルードは最終的にロバートの罪を許すが、それと同時に彼に政界引退を促す。ここでロバートの政治家としての将来性を摘もうとする彼女に対し説得しようと立ち上がったのが、彼らチルターン夫妻にとって良き助言者のアーサーである。

> ". . . Women are not meant to judge us, but to forgive us when we need forgiveness. Pardon, not punishment, is their mission. . . . A man's life is of more value than a woman's. It has larger issues, wider scope, greater ambitions. A woman's life revolves in curves of emotions. It is upon lines of intellect that a man's life progresses. Don't make any terrible mistake, Lady Chiltern. A woman who can keep a man's love, and love him in return, has done all the world wants of women, or should want of them."（241－42; act 4）

このような考えに対し、ガートルードは一切反論することなく、自身を納得させるかのように彼の言葉を繰り返し、単に受け入れてしまう。当初、彼女は “Circumstances should never alter principles”（act1; 186）と強い姿勢を見せていたが、最終的には夫の過去を受け入れ、その結果、ロバートは名誉も地位も失わずに済み、法的にも社会的にも一切の制裁を免れることになる。これに関して、Joseph Bristow は、“Gertrude Chiltern compromises herself to married life with a man whose successful career she knows rests on a terrible act of parliamentary corruption”（Bristow 215）と指摘し、彼女が信念を失うことに対し否定的な見方を示している。しかし、信念を持ち続けることが必ずしも正しいとは言えないのではないだろうか。ロバートの過ちを認めず、彼にのみ高い理想を求め続けてきた彼女自身も、手紙の一件で常に清廉潔白であることはできないと思い知らされ、他人に厳格な態度を取ることはできないという考えに達したことで、夫を許しその罪を受け入れる決意をしたのだ。それゆえに、この段階において彼女は、ブリストウの言うような、結婚生活に妥協したということにはならないだろう。ガートルードは新たな変化を受容することのできる、様々な可能性を孕んだ人物であると言える。しかし、そうした幅の広さや可能性の広がりは、彼女をミセス・チーヴリーと近しい立場に位置付けることになるのだ。

一方で、ミセス・チーヴリーにも貞女というほどではないが、真実の恋心が窺える場面がある。彼女の評価できる一面を見てみたい。

> “. . . I have arrived at the romantic stage. When I saw you last night at the Chilterns', I knew you were the only person I had ever cared for, if I ever have cared for anybody, Arthur. And so, on the morning of the day you marry me, I will give you Robert Chiltern's letter. That is my offer. I will give it to you now, if you promise to marry me”（224 – 25; act 3）.

これは、この作品の後半部で、アーサーに結婚の約束を結ぶなら、ロバートの手紙を返還するとした、ミセス・チーヴリーの言葉である。このように

アーサーへの愛が語られる場面だが、アーサーはこれを「愛の冒涜」(226; act 3）だと一蹴する。しかしながら、彼の言うようにミセス・チーヴリーの言葉を単なる口先だけの誘惑文句であると一方的に見なすことが、彼女に対する正当な評価と言えるだろうか。完璧だと思われていたガートルードでさえ、貞女としての立場を崩され得ることが証明されたのであるから、終始悪の象徴として描かれているミセス・チーヴリーに対する捉え方にも同じく異なる視点から見る余地があるのではないだろうか。彼女の他の発言に注目すると、長年オーストリアで暮らしてきた異国の目を持つ彼女の、イギリス人の気質やイギリス社会そのものに対する痛烈な批判が見られる。例えば、過去に犯した不正の事実を隠そうとするロバートに対し述べた、“In old days nobody pretended to be a bit better than one's neighbours . . . Nowadays, with our modern mania for morality, everyone has to pose as a paragon of purity, incorruptibility, and all the other seven deadly virtues”（180; act 1）という発言は、まさに的を射たものである。しかしながら、悪女であるがゆえに彼女の言葉が誰かの心に留まることはない。こうしたことを考慮すると、先述の彼女のアーサーへの発言が信用に値しないものであるのか、それとも元婚約者の彼に対する愛情から発せられた本音であるのかについて確定的な判断を下すことはできず、決定不能であるように思われる。Norbert Kohl が、ミセス・チーヴリーは、策略的な面、それも犯罪者としての面が強調されているが、世間知らずで融通の利かない道徳観念を持ついわゆる「善良な女性(good women)」(Kohl 220）よりも、彼女のように過去を持つ「堕落した女性（fallen women)」(Kohl 221）の方が、はるかに現実的な人生観を持っているように思われると指摘しているように、ミセス・チーヴリーという人物はより評価されても良いのではないだろうか。

以上述べてきたように、貞操観念があり品行方正な人物として知られてきたガートルードは、ロバートのように咎められるべき罪を実際に犯したわけではないが、夫同様に社会規範を破ったと見なされ得る行為をしたことにより、客観的に見れば彼女の中の貞節と不貞の境界は崩れ、一線を画していた

はずの、悪女と誉れ高いミセス・チーヴリーとの間の差異を縮めてしまう。物語の前半部で、“I never change”（208; act 2）と断言していたガートルードであるが、こうして変わらざるを得ない理由が存在したのだ。一見対照的に描かれている二人だが、このように類似性を孕んでいるのであり、彼女たちを一概に隔てることはできない可能性があると言えるだろう。それゆえ、夫であれ妻であれ理想的である／理想的でないとする、ステレオタイプ化した見方は容易に反転し得るということがわかるだろう。

2．Robert と Arthur について―誠実と不誠実の境界―

本作品を通して、ロバートとアーサーはそれぞれ真面目で堅実な政治家と道楽者というイメージで描かれている。しかしながら、物語の進展に伴い、彼らのイメージとは異なる一面が見えてくる。本章では、ロバートとアーサーに対する限定的なイメージが容易に反転し得ることについて考察する。また、ロバートの妹である Miss Mabel Chiltern とガートルードの二人の女性を比較することで浮かび上がる、後者の「非理想」的な妻の姿にも着目したい。過去の不正の露見により、それまで「清廉潔白」であることを貫いて生きてきたように思われていたロバートに、「不誠実さ」というそれとは相反する性質があると判明する。彼は自らの問題を捨て置き、「真の友人（a thoroughly good friend）」（198; act 2）だと感謝していたアーサーに対し不誠実だと非難する。ガートルードと同様に、助言を求めるためアーサー宅を訪ねていたところ、隣室に身を潜めたミセス・チーヴリーに、二人の会話が盗聴されていたことを知り、アーサーに裏切られたと勘違いしたロバートは、腹を立て次のように言葉を荒げる。“What have I to do with her intrigues with you? Let her remain your mistress! You are well suited to each other. She, corrupt and shameful—you, false as a friend, treacherous as an enemy even—”（222; act 3）、“You have lied enough upon your word of hounor”（222; act 3）。理由はどうであれ、真偽を確かめることなくこのように一方的に罵倒し相手の人格を貶める態度は浅はか且つ短絡的で、そこに誠実さを見る

ことはできず、彼の身勝手な性格を強調しているようでもある。これについて、Peter Raby は、アーサーとミセス・チーヴリーとの関係に疑惑を抱き、モラル違反だと指摘することで、ロバートは自身の不名誉な過去の隠蔽を図ろうとしている（Raby 1997, 157）と述べているように、そこには彼の不利な状況が一向に変わらないことに対する焦燥感から、他人に対し同等の非を見出すことで、自身に向けられている道義的責任を緩和したいという心情が滲み出ているように感じられる。

一方で、アーサーはこうした攻撃を受けても尚、ロバートを見放すことなく、破滅の人生から彼を救い出そうとするその思いに変わりはない。前章でも言及したように、アーサーはロバートに政界を去ることを勧めるガートルードに、考えを改めるよう説得を試みる。彼は、妻のために大きな犠牲を払おうとする夫、夫から大きな犠牲を受け取ろうとする妻は、双方共に生涯に亘って苦しみと後悔を背負うことになり、ロバートが権力を失うことは全てを失うことに匹敵するものであるがゆえ、愛を感じる力さえ失うことになり兼ねないと諭す。アーサーの父親である Lord Caversham は、息子とロバートとの違いを強調するため、ロバートの世間での評判を引き合いに出し、次のように語っている：「ロバート・チルターン卿は若き新進気鋭の政治家であり、素晴らしい雄弁術と傷一つない完璧な経歴を持つ、清廉潔白な人物としてその名を知られている。英国政界を代表する最高の政治家であり、緩んだ道徳観を持つ他国の政治家とは大きな対照をなしている（Sir Robert Chiltern . . . most rising of all our young statesmen . . . Brilliant orator . . . Unblemished career . . . Well-known integrity of character . . . Represents what is best in English public life . . . Noble contrast to the lax morality so common among foreign politicians）」（231; act 4）。こうした上で、息子アーサーにはこのような類のことは全く当てはまらないと述べており、そのロバートからは「ロンドン一の怠け者、遊び人（the idlest man in London）」（172; act 1）だとアーサーは言われていた。彼らの言うように、アーサーは快楽を追求する怠惰な人生を謳歌しているようであり、彼自身も真面目なことは性分に合

わないと語っていることから、自他ともに認める道楽者であると思われる。しかしながら、自己犠牲を厭わず、友人夫婦の危機を献身的に支え、問題解決に尽力するその姿には、彼の人情味溢れる人間性が表れており、ロバートが高く評価されることで、実際とは反する二人の違いをひときわ際立たせる印象を与える。アーサーの働きによりロバートとガートルードの夫婦関係は修復に向かうが、彼無くして新たに二人が深い愛情と絆で結ばれることはなかっただろう。このように、一見すると、ロバートは「真面目」、アーサーは「不真面目」という二項対立的な位置づけに置かれているが、当初彼ら二人が持っていたこうしたイメージは、物語の進行につれて崩壊していくように思われる。

ここで、後にアーサーの婚約者となるメイベルに注目しておきたい。メイベルは物語の裏側で巻き起こる奔走劇と直接の関係はなく、彼女の登場場面も多くはないが、アーサーを論じる上で重要な役割を果たしている人物である。彼女の義姉であるガートルードと比較してみたい。「ピューリタン的な厳格な道徳観を持ち、罪を犯した者に対しては容赦なく批判し、知的だがやや偏狭な考えの持ち主である」（Kohl 218）ガートルードは、初め婦人自由協会（[T] he Woman's Liberal Association）（197; act 2）の集会に精力的に参加し、専らの関心事である参政権や女性警察官の問題をはじめ、工場法や八時間労働法案等について意見交換を行っていた。実際に19世紀末のイギリス国内において、各地でこうした活動が勢いを見せ、1886年には婦人自由連盟（The Women's Liberal Federation）として発足している。ガートルードは女性の地位・権利向上を目的とした活動に注力しており、一見すると時代に新しい革新的な考えの下行動する、いわゆるニュー・ウーマン（New Woman）であるように思われる。しかしながら、次章で詳述するが、彼女は結局のところ、ただ自身の中で築き上げた夫への極端に美化された理想像に囚われ、社会規範という既成の枠組みから逃れられずにいた女性だったのではないだろうか。

その一方で、メイベルについては、花のような可憐さを纏った魅力的な女

性であり、「若さゆえの気ままさ（*the fascinating tyranny of youth*）」（166; act 1）や「天真爛漫な性格（*the astonishing courage of innocence*）」（166; act 1）は子どものようだと表現されている。そしてその容姿は、「イギリス美人の完璧な典型（*a perfect example of the English type of prettiness*）」（166; act 1）であり、まるで「タナグラ人形（*Tanagra statuette*）」（166; act 1）のようだと描写されている。タナグラ人形は紀元前4世紀から3世紀頃にかけて作られた粘土製の人形で、当時美術品としてその素朴な姿が好まれていたようであり、そのような素朴な純粋さを持ったメイベルを、ワイルドは好ましい女性として描いていると佐々井啓氏は述べている。さらに、メイベルは思ったことを率直に言葉にしたり、活人画の練習に参加して逆立ちしたりと、ガートルードにはない活発さがあり、伸びやかに、そして快活に日々を過ごしており、彼女とは対照的である。また、本戯曲の終盤部で、“All I want is to be . . . to be . . . oh! a real wife to him［Arthur］”（245; act 4）とメイベルは述べているが、まるでロバートとガートルードに対する皮肉であるかのようであり、兄にとってガートルードが「本当の妻（real wife）」ではなかったのではないかと思わせる印象的な台詞に響く。メイベルはガートルードのような一面的な見方をしない人物であり、彼女が「理想」の夫婦を演じていることを見抜いていた。つまり、外見と実際（real）の区分が難しいことを知っていたと言えるだろう。

3．Gertrude と Robert について―正しさと過ちの境界―

以上論じてきたように、それぞれ正反対の性質を持っているように思われていたガートルードとミセス・チーヴリー、ロバートとアーサーの関係性は単純な二分法には還元できないものであることがわかった。それでは、ガートルードとロバートについてはどうであろうか。本章では、二人の夫婦関係のあり方について考察したい。本戯曲は彼らが共に無自覚のうちに理想の夫婦を演じていたが、最後には互いに「理想」から解放され、真の夫婦関係構築への兆しが見え始めたところで幕を閉じるエンディングとなっている。

ロバートは不正に手を染めた当時、Baron Arnheim に不正を指示した秘密の手紙という強力な証拠品をミセス・チーヴリーに握られている。失脚・破滅に瀕する事態に直面した彼は、政治生命の終焉だけでなく、妻ガートルードとの夫婦関係の崩壊という二重の危機を意識せざるを得なくなる。過去に犯した罪が発覚し、妻からの愛情を失ってしまうことを強く恐れているロバートは、一昔前の罪が今頃になって露見し、自らの一生が破滅に追い込まれていくことの不当さを嘆いている。彼が世慣れていない若者であったということは理解できるが、現在40歳である彼が、罪を犯した「18年前」のことを、「子ども同然」だったと表現し、年齢を理由に自らの罪を正当化するその姿勢は、責任逃れでしかないように思われ、「理想の夫」とはかけ離れたものである。

そもそも、ロバートがこのような人生を歩んだのは、アーンハイム卿の影響である。ロバートは、彼を「非常に緻密で頭が切れる（a man of a most subtle and refined intellect）」（192; act 2）、「教養のある魅力的で秀逸な人（A man of culture, charm, and distinction）」（192; act 2）だと絶賛しており、アーンハイム卿が唱える「権力の哲学」（192; act 2）に陶酔していることに端を発する。そして、“power, power over other men, power over the world, was the one thing worth having, the one supreme pleasure worth knowing, the one joy one never tired of, and . . . in our century only the rich possessed it”（192－93; act 2）という彼の思想は、現在でもロバートの心を捉えて離さない。優秀で才気溢れる政治家であるというロバートの現在の地位は、政治的不正により得た資金を元手に成り立っており、「清廉潔白」と「不正」という一見相反する二つの性質は、彼自身の中に併存しているのである。ロバートはこれまでに幾度となく贖罪のための献金（conscience money）（194; act 2）を重ね、不正によって得た額の２倍もの金額を慈善事業に寄付してきたことを雄弁に述べていることから、過去の犯罪さえも、現在の自分を生み出すためにはやむを得ないことであったと正当化していることは明らかである。彼が政治家としての人生を選択するのであれば、妻ガートルードに不正の事

実を打ち明けることで、ミセス・チーヴリーからの脅迫という苦境にあたることは可能であった。しかしながら、彼にとって罪を告白することは、ガートルードの愛を失うことに直結する問題であり、彼の公私は分かち難く結びついているのだ。

一方で、一章でも述べたように、ガートルードは学生時代から操行優良であり、常に模範的な人生を送ってきた。そして、ロバートという理想とする夫を伴侶に得、まさに理想そのものの人生を送ってきたように思われていた。しかし、その「理想の夫」にも不完全さが発覚し、その事実を受け入れられずにいた。

> "All your life you have stood apart from others. You have never let the world soil you. To the world, as to myself, you have been an ideal always. Oh! be that ideal still. That great inheritance throw not away—that tower of ivory do not destroy. Robert, men can love what is beneath them—things unworthy, stained, dishonoured. We women worship when we love; and when we lose our worship, we lose everything. Oh! don't kill my love for you, don't kill that!"（187; act 1）

この一節で、ガートルードは男性を「象牙の塔（tower of ivory）」と表しており、現実離れした孤高の存在である「理想の夫」像を披露している。それは、「象牙の色」のように清廉潔白で毅然とした態度を取り、堂々と聳え建つ「塔」のようにあるべきだとしており、ガートルードの夫に対する異常なまでの理想化が見て取れる。この様子から、ガートルードが愛していたのはロバートではなく、彼の高潔さであることが窺える。彼女にとって、彼は「純粋さ、高潔さ、誠実さ（a thing pure, noble, honest）」（210; act 2）の権化であり、「愛するに値する（worthy of love）」（188; act 1）人物であったのだ。Richard Dellamora が "Her integrity depends on possessing an 'ideal husband'. Once put his standing in doubt . . . [her] 'marriage' and 'love' will cease to exist"（Dellamora 126）と述べているように、彼女の中で神話化されていた

ロバートの「染み一つない（stainless）」（198; act 2）完璧な高潔さが崩れ去ったこの時点で、彼は愛される資格を失うことになったと言えるだろう。

さらに、ガートルードは自身が道徳的に正しい人間であると自負していた。彼女について、過ち（folly）（220; act 3）や軽率な言動（indiscretion）（220; act 3）とは無縁で、完璧であるがゆえに同情心がなく、冷淡で厳しい、情け容赦のない性格だとロバートが述べていることからもわかるように、彼女はこれまで自身がしてきたと同様に、夫にも社会規範に従わせようとしていたのである。先に引用したパウエルは、ヴィクトリア朝後期における女性から見た理想の男性（a perfected male）（Powell 90）の概念について、新世代の女性たちは、ステレオタイプ化された女性らしい純潔観を拒絶するのではなく、腐敗した男性社会にもそれと同じ価値観を要求し、女性の純潔さはむしろ守りつつ、男性に女性同様の高い基準に従うことを強調していた（Powell 90）と述べている。ガートルードの結婚観はパウエルの指摘に相当するものであり、彼女はこの時代によく見られた、枠にはめ込んだ「理想の夫」という男性像に囚われていたことがわかる。

> "Why can't you love us, faults and all? . . . All sins, except a sin against itself, Love should forgive. . . . It [A man's love] is wider, larger, more human than a woman's. . . . You made your false idol of me, and I had not the courage to come down, show you my wounds, tell you my weaknesses. . . . And so, last night you ruined my life for me . . . I could have killed it [the sin of my youth] for ever, sent it back into its tomb, destroyed its record, burned the one witness against me. You prevented me. . . ."（211; act 2）

これは、人間の弱さや不完全さを認めなかったガートルードに対し、反論しようとしたロバートの台詞である。このようなガートルードとロバートのやり取りから見えてくるのは、夫に完璧な高潔さを要求する妻と、その妻の愛を失いたくないという強い思いに支配され、彼女の求める理想像であろうとした夫の実態が、世間が羨むような「理想の夫婦」ではなく、共に「理想」

に翻弄される弱き者同士であったのではないかということである。そして、彼らの心を支配していた「理想」が崩れたわけだが、それは二人にとって否定的というよりむしろ肯定的に捉えることができるのではないだろうか。このことにより、ロバートとガートルードの夫婦関係はそれまでの保守的なものではなくなり、二人は真の意味での愛情に目覚め、「新たな人生（a new life）」（245; act 4）を共に歩んでいくことになるのだ。

おわりに

以上見てきたように、一見世間から「理想の夫婦」と羨望の眼差しを向けられていたロバートとガートルードだが、実際にはステレオタイプに囚われた、決して理想とは呼べない夫婦関係であることが判明した。しかしながら、互いを知ることで、二人の関係はそうしたステレオタイプから解き放たれたものへと変化したのだ。さらに、Eva Thienpont が、ワイルドの喜劇には隠された深刻さがあり、ヴィクトリア朝における男性と女性、善と悪というようなステレオタイプ化された定義に一石を投じ、皮相的で偽善的な社会の姿を露わにしている（Thienpont 107）と述べているように、全く相反する性質やイメージを持つガートルードとミセス・チーヴリーという女性同士の関係、及びロバートとアーサーという男性同士の関係を分析することで、様々なステレオタイプ的な関係性の揺らぎや反転の可能性が見えてくる。そして、John Sloan も指摘するように、本戯曲は、アーサーの未来が完全に “domestic”（245; act 4）なものになるということが示唆されて幕を閉じる。父親のキャヴァシャム卿は、アーサーが “I prefer it［his career］domestic”（245; act 4）と述べたことに対し、彼の婚約者メイベルにとっての「理想の夫」であれと強調する。しかし、その一方でメイベルは “An ideal husband! Oh, I don’t think I should like that. It sounds like something in the next world”（245; act 4）、“He can be what he chooses”（245; act 4）と、ありのままのアーサーでいることを求め、「理想の夫」である必要はないと語りかける。このようなやり取りから読み取れることは、人間をステレオタイプ化した見

方に収めるべきではないということであり、そこには各々の持つ個性を受容し合うことの重要性が示されているのではないだろうか。全てがアーサーの言葉に帰結するとは言い切れないが、アーサーとメイベルのように、ステレオタイプ的視点から離れた判断ができる夫／妻こそ、理想の人物であるのかもしれない。軽妙なジョークを飛ばす道楽者で、一見「理想の夫」からは懸け離れた存在のアーサーではあるが、自分は家庭的な人間であるという終盤部の彼の発言は、キャヴァシャム卿の言う "great future"（245）を求め野心的に生きることが男性のあるべき姿だとされるステレオタイプ的な考えに左右されず、己の道を突き進もうとする意思の表れだと言え、限りなく本音に近い真面目なコメントであり、シリアスな響きを帯びるように思われる。Peter Raby が、『理想の夫』には社会に遍く道徳や理想というものの無意味さが非常に巧みに示唆されている（Raby 2005, 198）と述べているように、その作品名からも暗示的に見て取れるが、本戯曲は見かけと真実（real）の反転する可能性が見えていないことを皮肉るとともに、固定観念に囚われない真の「理想」を模索的に探究している作品であると言える。

注

本稿は日本英文学会関西支部第11回大会（2016年12月17日）において、口頭発表した原稿を加筆・修正したものである。

1　Kerry Powell の *Oscar Wilde and the Theatre of the 1890s* 収録の Chapter 6 "*An Ideal Husband*: Resisting the Feminist Police" を参照。

Bibliography

Bristow, Joseph. "'A Complex Multiform Creature': Wilde's Sexual Identities," *The Cambridge Companion to Oscar Wilde*. Ed. Peter Raby. Cambridge: Cambridge UP, 1997. 195－218.

Dellamora, Richard. "Oscar Wilde, Social Purity, and *An Ideal Husband," Modern Drama*, 37. 1. Spring 1994. 120－138.

Kohl, Norbert. *Oscar Wilde: The Works of a Conformist Rebel*. Trans. David Henry Wilson. Cambridge: Cambridge UP, 1989.

Powell, Kerry. *Oscar Wilde and the Theatre of the 1890s*. Cambridge: Cambridge UP, 1990.

Raby, Peter. "Theatre of the 1890s: Breaking Down the Barriers," *The Cambridge Companion*

to Victorian and Edwardian Theatre. Ed. Kerry Powell. Cambridge: Cambridge UP, 2005. 183－206.

———. "Wilde's Comedies of Society," *The Cambridge Companion to Oscar Wilde*. Ed. Peter Raby. Cambridge: Cambridge UP, 1997. 143－60.

Sloan, John. *Oscar Wilde*. Ed. Patricia Ingham. Oxford: Oxford UP, 2009.

Thienpont, Eva. "From Faltering Arrow to Pistol Shot: *The Importance of Being Earnest*," *The Importance of Being Earnest, A Norton Critical Edition*. Ed. Michael Patrick Gillespie. New York: Norton, 2007.

Wilde, Oscar. *An Ideal Husband, The Importance of Being Earnest and Other Plays*. Oxford: Oxford UP, 2008.

佐々井啓『ヴィクトリアン・ダンディ―オスカー・ワイルドの服飾観と「新しい女」―』勁草書房、2015年。

モイル、フラニー『オスカー・ワイルドの妻コンスタンス―愛と哀しみの生涯―』那須省一訳、書肆侃侃房、2014年。